

◆1章 はじめに◆

1 意欲とは

● 学術用語にない意欲

意欲の辞書的な定義は「積極的に行動しようとする心」(岩波国語辞典)である。

ところが、意欲に相当する適切な単語となると、例えば英語にはこれこそびったりというものは特には見当たらない。したがって、ドイツなりアメリカからの輸入学問である心理学でも、意欲という言葉は専門用語としては用いられず、欲求 (need)、動因 (drive)、誘因 (incentive)、動機 (motive)、動機づけ (motivation) などの訳語がもっぱら用いられてきた。まずは、これらの用語を整理し、さらに日本語の意欲という言葉のもつ意味合い、とりわけ教育実践的な意義について考えることにしよう。

まず、動因という言葉はもっぱら生得的な要求を指し、後述するように、飢え、渇き、性、傷みの回避などがその中心である。飢えという状態が、飢えを癒す食物への

要求を生み出し、さらに食物を得るための行動を引き起こす。その行動のエネルギー源こそが動因なのである。また、欲求という言葉は本来的には広い意味をもつが、歴史的には動物を用いての心理学研究が盛んだった古い時代に比較的よく使われたことから、ニュアンスとしては動因に近い。

動因や欲求が個人の内側にあるエネルギー要因であるのに対し、誘因は外側にあつて個人に要求を生じさせる対象物を指す。すでに満腹であるにもかかわらず、おいしそうなケーキを出されるとつい手がのびることがある。心理学では、これをケーキという誘因によって生じさせられた摂食行動と考え、誘因動機づけによる行動と呼ぶ。ちなみに、動物には誘因動機づけが生じにくい。ため、過剰なカロリーや偏った栄養の摂取はあまり見られず、産後に体重が増加しているといった現象もほとんどないという。

もつとも概念的に広いのは動機で、飢えや渇きといった生理的な要求のほか、承認や親和、達成などの社会的な要求も含む。また、誘因によって引き起こされた要求も動機の一つと考えてよからう。動機づけとは、この動

機が生じている状態を指す言葉であり、したがって何らかの意味で個人に緊張状態が存在し、それに呼応した何らかの行動を生み出す準備が整っていることを意味する。今日では、動機ないしは動機づけという言葉がもつとも幅広く、また一般的でもあるので、心理学の学術用語としては、これがもつとも頻繁に用いられる。いずれにせよ、これらの用語はすべて、ある個人を特定の行動に駆り立てる心的エネルギーを指す言葉であることに違いはない。

● 関係性の中での主体性

一方、意欲の語源は意志と欲求であるといわれている。すると、意欲とは意志と欲求の合成語であり、あえていえば「意志的欲求」ということになる。和英辞典を引いてみると、このニュアンスで一番近い意志に相当する語は volition であるが、これは自由意志で欲するという意味である。そこには、個人が自由な意図なり判断をもつて、明確な自覚の下に対象に接近するといった姿がイメージされよう。

これに対し、欲求は、前述のように心理学では非常に

生物的なものと見られてきており、環境要因や生理的条件によって運命的に決定されるものとのニュアンスが強い。したがって、むしろ自分以外の何ものかによって駆り立てられるといった姿が典型的なイメージである。このように、少なくとも西洋的な概念では、意志と欲求はある意味で対極にあるものであり、両者は簡単には結びつきにくい。

ただ、この背後には、個人の心的機能に対するすぐれてヨーロッパ的な考え方があることに注意する必要がある。すなわち、個人は環境と明確に分かれた存在であるという強力な観念である。

一方、日本などでは、よくもわるくも個人と外部との心的境界が不明瞭であり、それは個人の純粹な自由意志の存在というものが、時に希薄なほどである。重要な意志決定に際しても、他者との関係性や、時には「空気」とか「流れ」といったものが優先される。西洋的な観念では、そこには自由意志はなく、環境によって運命づけられた隷属的な心的機能のなせる業との解釈になるが、これは必ずしも当たらない。

なぜなら、例えば日本人の場合、他者との関係性や「空

気」「流れ」を主体として積極的に受け入れ、十分に納得してそうしているという心的状態がそこにはありうるからである。環境的に運命づけられた目標に対して、それを拒絶したり、その場から逃避するというよりも、その場にとどまり、そこにおける自分の持ち分を果たすといった意欲の状態が、極めて自然で日常的なものとしてイメージできるのではなからうか。

しかも、だからといって必ずしも運命に隷属し、集団に埋没しているわけではなく、その中で十分に自分らしさを発揮し、自己実現を果たすといった姿も認められる。多くの場合、まったく受け身的に「空気」に「流され」ているのではなく、かなり主体的に「空気」をとらまえ、自分らしい「流れ」への乗り方を工夫しようと試みているのではないか。いわば、出会った「場」との関係性の中で自分の居場所を見出すといった姿であり、他者や環境、集団との関係性を前提とした自身のアイデンティティの模索、個性の確立である。

これは、個人と環境との明確な区分の上に成り立っている西洋的な心の観念からすれば、およそ理解し難いものである。このように考えるならば、日本において、

意欲という、心理学の現状も含め西洋的には相容れ難い意志と欲求が合成された語が存在し、また長年にわたりごく日常的に用いられてきたことは興味深い事実といえよう。

●教育の個性化と「意欲」

このような、いわゆる「間人的」な個人のあり方は、日本などの伝統的な精神風土であるが、一方で、近年、西洋的な個人主義の考え方や自由意志の尊重がより強く叫ばれるようになってきた。急速な国際化の進展もあり、ささいなことでも自分では決められない日本人のあり方が痛烈に批判されたことは記憶に新しい。また、他者や環境、集団との関係性の中で自分らしさを実現するというよりも、万事受け身的に「流される」こと、集団の中で無個性的な手段として埋没することの方が現実には多かったのではないかという疑問もある。それでは、真に一人ひとりの子どもがよく育っているとはいえないのではないだろうか。

かくして、教育の世界でも、西洋的な意味での個人主義に基づく教育の方法が導入されつつある。個性の伸張

はもとより「おちこぼし」を克服する意味も含め、個性化教育なり個に応じた指導の名の下、より個別的な形態や多様な方法による授業が大規模に展開され始めているのである。これは、結果的に従来子どもたちにとって根源的な「場」であった学級や、さらには学年をも解体し、新たな、また多様な対人的、集団的「場」をもたらし、学習意欲のあり方に少なからざる影響を与えるであろう。また、これは学習集団の再編成にとどまらない。学習空間や学習時間、教授組織も大きく変容しつつある。オープン・スペースやモジュラー・スケジューリング、チーム・ティーチングなどがそれである。これらの教育方法的变化は学習環境という観点において総合的に位置づけることができるが、このような学習環境の変化は、子どもたちの学びの「場」、さらには学習意欲にどのような影響を与えるのだろうか。

2 本論の構成

意欲という言葉を自然なものとしてきた個人と集団とが相即的關係にある精神風土に対して、個人主義的志向は子どもたちの学びの「場」にどのような影響を及ぼすのだろうか。その地平において、新たな個人と集団との均衡関係は可能なのか。本論では、個人の個性的成長と集団過程の充実が両立できる「場」の創造の可能性を求め、立場から、個人主義の時代における中学生の学習「意欲」のこれからの姿を理論的考察といくつかの事例検討によって明らかにしていきたい。

2章 心理学の意欲研究において「場」という概念がどのように取り扱われてきたのかを二つの視点から理論史的に振り返る。

①動物研究も含めた様々な意欲の理論が主体と環境との関係をどのように位置づけてきたか。

②対人相互作用をどのように位置づけてきたか。

これらの考察により、今後の概念構成において求めら

れるいくつかの条件が明らかとなるであろう。

3章 教育方法研究において「場」という概念がどのように取り扱われてきたのかを同じく二つの視点から吟味する。

①学習環境の拡張・変化に関するもの。

②実践的に考え得る様々な集団過程の位置づけに関するもの。

これらの考察を通して、来るべき時代の学校教育において望まれる学習環境のあり方、個人の個性的成長と両立する集団過程のあり方の青写真が見えてくることが期待される。

4章 3章までの考察を基盤に、「場」と意欲についての仮説の構成を試みる。

5章 そこで理論的に得られた仮説を二つの角度から実践的に検証する。

①社会科の実践事例一単元分の詳細な記録の分析による検討。

②いくつかの先進校のカリキュラムレベルでの取り組みによる検討。